

世界遺産菅沼集落のモニュメントデザイン

黒川 威人

1. はじめに

富山県と岐阜県にまたがる「白川郷・五箇山の合掌造り集落」は1995年12月世界遺産の指定を受けた。筆者はその正式決定の1ヵ月ほど前に指定集落の一つ菅沼集落の所在する上平村から指定記念モニュメントのデザインを依頼された。

菅沼集落は、合掌造り家屋は9棟しかなく、指定された三つの集落中最も小さいが、歴史的集落としての真正性をよく保存している美しい集落である(図1)。次頁に集落平面図を示す(図2)。

ここで、「合掌造り」とは、「小屋内を積極的に利用するために叉首構造の切妻造りとした茅葺きの家屋」のことで、日本の他の地域には見られない民家の形である(図3)。急勾配の大きな屋根は重い積雪に耐え、またその内部を何層にも分けて養蚕などに利用するための工夫から生まれたもので、かつてはこの近辺のほとんどの集落に、合掌造りの家が並んでいた。しかし現在ではそうした風景を残しているのは、この菅沼集落を含む三つの集落だけであり、世界の貴重な文化遺産となっている。

本稿は、この菅沼集落における記念碑のデザイン

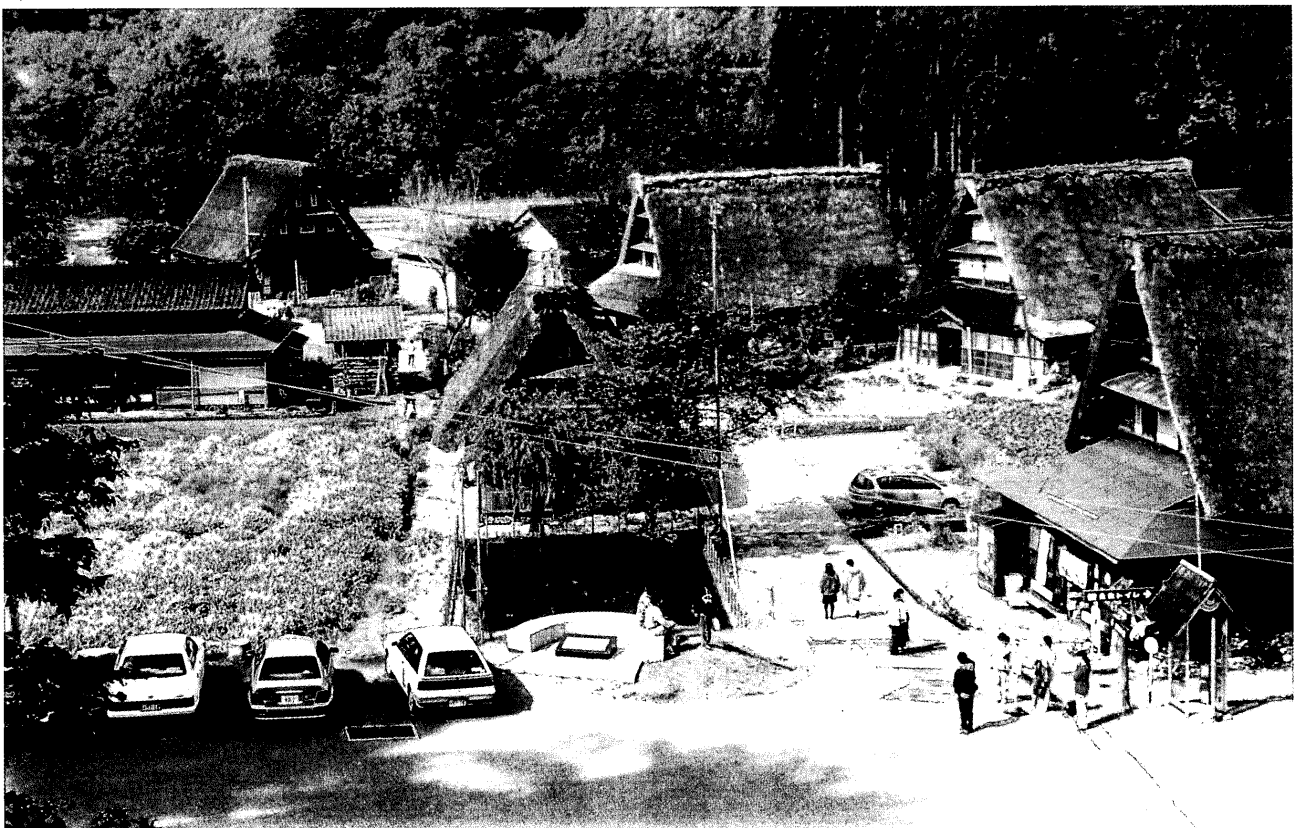


図1 菅沼集落風景



図2 菅沼集落平面図 (参考・引用文献より転載)



図3 代表的合掌造りの民家 (上平村岩瀬家)

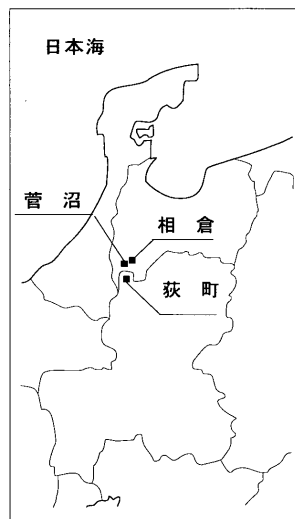


図4 世界遺産指定集落位置図

および施工のプロセスの記録である。

2. 歴史と文化

世界遺産指定の3集落は図4のように2つの県にまたがっている。北のほうから順に平村・相の倉集落、上平村・菅沼集落、白川村・荻町の3つであり、前2集落は富山県、残る1集落は岐阜県に属する。

この地方は、日本の代表的な高山の1つである白山（海拔約2,702m）を中心とする深い山岳地帯にあり、しかも、日本有数の豪雪地帯である。

1950年代まではこの地域の集落と地域外との交渉はきわめて少なく、そのために合掌造り家屋によって特色づけられる独特の文化が形成され、継承されてきた。

これらの村は、農地は限られ、産業としては、江戸時代から塩硝、紙漉き、絹織物のための養蚕が主であった。

明治以降は西洋から安価な硝石が輸入されるようになり塩硝の生産は行われなくなったが、紙漉きとともに冬の間の産業として、雪深い当地では重要な産業であった。

その後、明治・大正期には養蚕・製糸が盛んになったが、これらはすべて合掌造り家屋の大きな床面積が役立った。

この地方は前述したような特異な地理的条件と気象条件の中にあって相互扶助のための特殊な社会制度を有していたが、背景には浄土真宗の信仰による精神的な強い結び付きがあったことが指摘される。

このような地域であるために農耕や宗教に関する諸種の祭礼や行事、これにともなう歌謡や舞踊などにかかわる多くの特色的な文化財と資料が保存され、また、現在でも伝承されているのである。

3. 記念碑のデザインプロセス

3.1 コンセプト

菅沼集落は戸数わずか8戸、人口40人（1994年8月現在）の小規模な集落である。したがって、

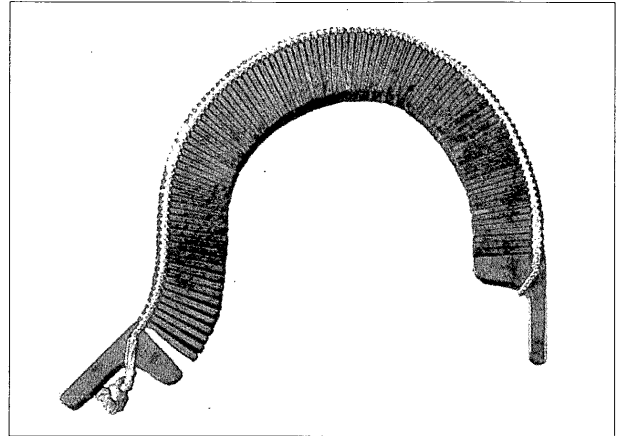


図5 民俗楽器「ささら」

この村に急速に観光客が入り込んで、村人の生活を乱すことは避けなければならない。世界遺産に指定されても、そこは、住人にとっては以前と同じく日常の生活の場なのである。

この観点から、記念碑は単なる象徴ではなく、それを観光客と村人がともに利用することで相互に交流が生まれ、世界遺産に対しても人々の理解が深まる場にすべきであると考えた。

3.2 場所の選定

菅沼集落は図2のとおり庄川が蛇行しながら東へ流れを変える地点の右岸の、舌状に北に突出した河岸段丘面にある。標高は330m前後で、ほぼ平坦な地形であるが、南東部がやや高く、それより北西方向に7mほど緩やかに下がっている。

段丘の南背後は急傾斜の山地となっているが、この中腹を切り開いて国道（156号）が通っている。このため外部からの訪問者はこの国道から下りてきて村にはいることになる。そこで設置場所は国道から下りてすぐの段丘上に定めた。

ここは、駐車場に隣接しており、車から下りた訪問者が足を止めるには便利であることと、幸い集落中心部よりは2メートルほど高い段丘上にあるため、集落のほとんど全貌を見渡すことができるといふ絶好のポジションを有している。

ここで集落の全体を眺めながら碑文を読めば、より理解が増すであろうことは疑いない、と考えた。

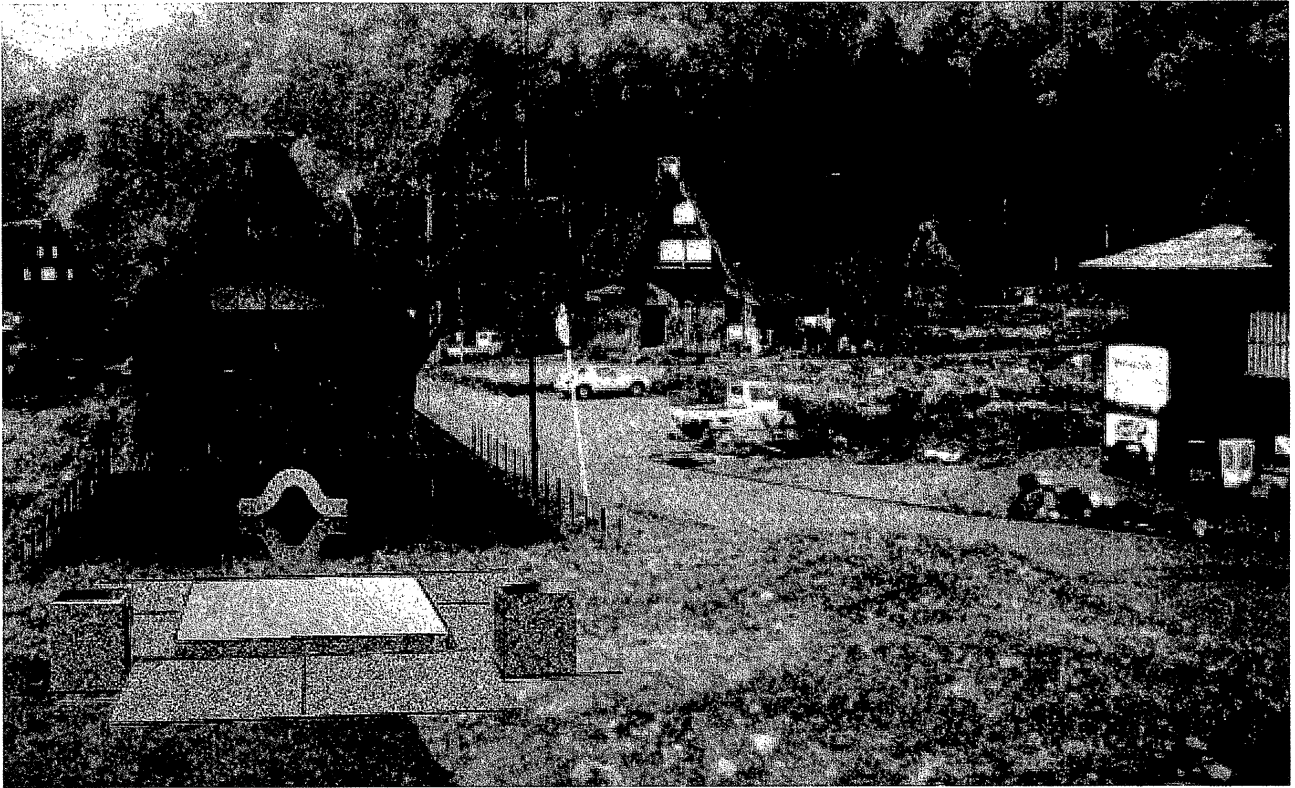


図6 初期のアイディアスケッチ (CG)

世界遺産菅沼合掌造り集落

THE WORLD HERITAGE SUGANUMA VILLAGE

THE HISTORIC VILLAGES OF SHIRAKAWA-GO AND GOKAYAMA-TRADITIONAL HOUSES IN THE GASSHO - STYLE

"The Historic Villages of Shirakawa-go and Gokayama" were inscribed upon the World Heritage List in December 1995 under the terms of the UNESCO Convention concerning the protection of the worlds cultural and natural heritage. Inscription on this list confirms the outstanding universal value of cultural or natural sites which deserve protection for the benefit of all humanity.

This World Heritage property, "The Historic Villages of Shirakawa-go and Gokayama" is composed of a set of three historic villages : Suganuma(Kamitaira-mura), Ainokura(Taira-mura), and Ogimachi(Shirakawa-mura).

In Suganuma Village, nine Gassho-style houses, three non-Gassho style houses and a number of earthen - walled and wooden - walled storehouses are on the list of structures to be conserved, together with the surrounding irrigated rice fields, dry crop land and shrine groves. In spite of its small size, Suganuma is important as an example of an entire village that retains its historic authenticity.

The Gassho-style house is defined as one which has a hatched gable roof, with a truss-like structure and a roof slope steep enough to provide adequate space for active use inside the roof volume. This type of farmhouse is very unique, not found in any other part of Japan. With the large, steeply-sloped roof innovated to bear heavy snow loads as well as to provide several interior attic levels which could be utilized for sericulture, this house type-featuring its truss-like frame system with pin connections and cross-bracing is quite rational and is regarded as one of the most highly developed farmhouse types in terms of both structural and functional efficiency.

In the past, almost all of the villages in this area had many Gassho-style houses, but now only three villages, including Suganuma, still retain the original character and beauty of the traditional landscape preserving their timeless value as would cultural properties.

Suganuma Village 菅沼

Historic Buildings and Environmental Features 歴史的建築群と環境的要素

- Nominated Area : 4.4ha 登録区域
- Gassho-style houses 合掌造り家屋
- Other Historic Buildings 非合掌家屋
- Shrine grove 社叢
- The Present Point 現在位置
- The Nominated Properties 遺産登録地

December 1995

白川郷・五箇山の合掌造り集落

「白川郷・五箇山の合掌造り集落」は、1995年12月、ユネスコの「世界の文化及び自然遺産の保護に関する条約」に基づき世界遺産リストに登録されました。このことは、合掌造り集落の、人類全体のために保護されるべき遺産としての優れた普遍的な価値が、世界的に認められたことを意味します。

世界遺産「白川郷・五箇山の合掌造り集落」は、上平村菅沼と平村相倉・白川村荻町の三つの集落から構成されています。

菅沼集落は、9棟の合掌造り家屋と3棟の非合掌家屋、土蔵・板倉、それを取りまく水田・耕作地、社叢などが保存すべきものとして特定されており、小規模ながらも歴史的集落としての真正性をよく保存している集落です。

「合掌造り」とは、「小屋内を積極的に利用するために又首構造の切妻造りとした茅葺きの家屋」のことで、日本の他の地域には見られない民家の形です。急勾配の大きな屋根は重い積雪に耐え、またその内部を何層にも分けて養蚕に利用するための工夫から生まれました。それは屋根の構造に又首と筋遣いを採り入れ、また屋根の荷重を両方の柱に均等に配分するなど極めて合理的で、機能的にも構造的にも民家建築史上最も優れたものの一つです。

かつてはこの近辺のほとんどの集落に、合掌造りの家が並んでいました。しかし現在ではそうした風景を残しているのは、この菅沼集落を含む三つの集落だけで、世界の貴重な文化遺産です。

図7 銘板面のデザイン

— 66 —

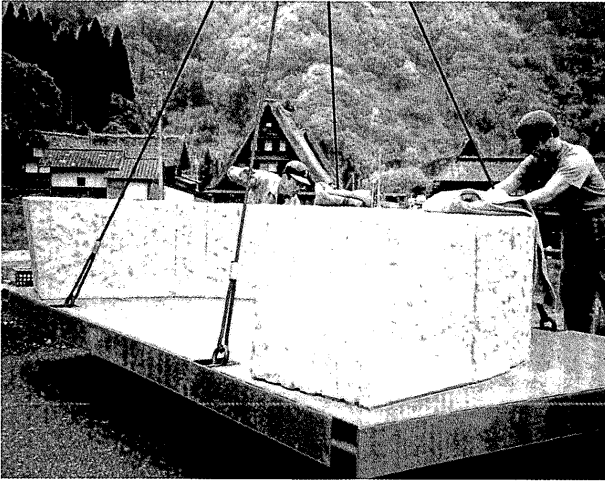


図8 オブジェのセッティング

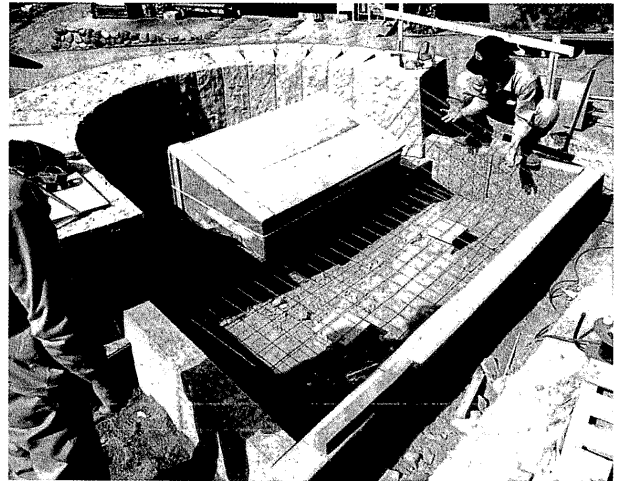


図9 コンクリート打ち前の状態



図10 玉石を埋める

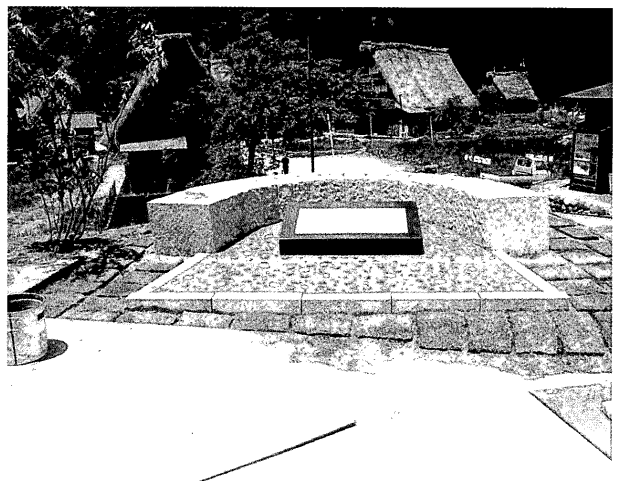


図11 桜植栽、芝張り完了

3.3 オブジェのフォルム

オブジェのモチーフに地元の伝統的な楽器である「ササラ」(図5)を使うことはかなり早い時期から考えていた。

民謡「こきりこ」に使用されるこの楽器はその優美な形とともに、数十枚の木の板が打ち合う際の他のどのような楽器にも見られない独特の迫力ある音が魅力である。この形をイメージソースに石のオブジェを彫刻家池上奨氏に依頼して制作した。

当初はアーチ状に立てた造形を考えていたが、過大すぎるという文化庁の指導によって、寝かせて使う方向に変更した経緯がある。図6はアーチ状のオ

ブジェを防火用水上に設置したアイディアスケッチの一つである。

なお、オブジェを倒して使うことにした好ましい代償として、これをベンチ代わりに使うことが可能となった。

3.4 銘板のデザイン

銘板は英語と日本語による説明文のほか、世界遺産のマーク、ユネスコのマーク、遺産登録集落地図、菅沼集落地図をレイアウトし、800×600、厚さ5ミリの銅板にエッチングで表現した。地色は硫化着色により自然発色に近い暗赤銅色とし川や道



図12 除幕式で挨拶する筆者

路、建物、文字は各々見やすく、かつ地色と調和する色を適宜採用した(図7)。

3.5 植栽

この地方は冬の期間が長いため彩りには乏しい。この集落の場合も雪解け後から初夏に至る間はほとんど花らしいものが見当たらない。また、その割には夏は直射日光が強い。そこで、季節には花をさかせ、夏には緑陰を提供してくれる樹木をオブジェの西側に植えることとした。なるべく地元種が良いと物色していたところ、幸い付近の住民が所有の山から濃い桃色の花を着けるといふ山桜を一本提供してくれたので、これを植栽することとした。

4. 施工

このプロジェクトはデザイナーである筆者に施工を含めて委託されたため、すべての行程にわたって設計監理を行うことができた。以下にそのプロセスを簡単に記す。

4.1 基礎工事

3×5メートル、深さ約400ミリ根切りし、クラッシャーを入れて転圧。GLより約300ミリ下に水平面を用意した。

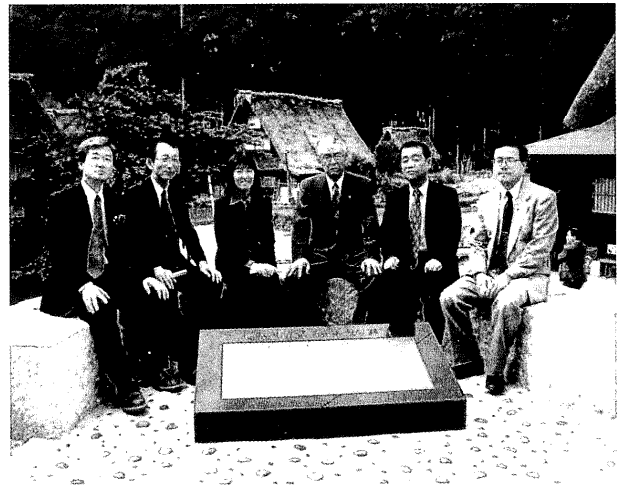


図13 除幕式出席の来賓。右から三人目は岩瀬上平村長。

4.2 オブジェ、石碑、銘板の制作

これらは別途部品として石川県において制作した。オブジェは17個の石塊をつなぎ合わせ、鉄製のプラットホームにあらかじめ固定された(接着)。

4.3 設置工事

まずオブジェを固定したプラットホームをクレーンで吊り上げ所定の位置にセット(図8)。続いて銘板をはめ込んだ石碑をセットする。さらに、フロントの石畳部分の縁石をたてる。内側には100ミリピッチの鉄メッシュを敷いて(図9)後、生コンクリートを流し込んで全体を固定。この段階で周囲は土を埋め戻した。

この後、西側に前述の桜の木を植栽した。

4.4 仕上げ工事

前の段階で打ち込んだコンクリートの硬化を待って、玉石の洗い出し仕上げとする。なるべく野趣が感じられるよう玉石は大小取り混ぜ、色も数色を取り混ぜた(図10)。

銅の銘板にはスタッドを立てておき、あらかじめ掘込んでおいた石碑面にはめ込み接着したが、さらに凍結による被害をさけるため石と銅板のすき間にシーリング剤を充填した。

周囲に埋め戻した土の部分に芝を張る。時期がやや遅かったので5センチくらいの間隔でべた張りに

した(図11)。最後に目地土を全体にかけて完成。

5. おわりに

1996年6月7日、折しも文化庁の担当官が来訪の機会に合わせ除幕式が行われた。写真はこの時のものである(図12~13)。

われわれが記念写真を撮り終えてすぐに、観光客が写真を撮るためにオブジェにすわった。碑文を手前に背後には合掌造りの民家群がはいるという絶好の記念撮影アングルであることを観光客は素早く見抜いている。

その後何度か訪れた時も、必ずといってよいほどここには旅人が座っていた。ただ村人と話をしている光景はまだ目にしていない。朝夕は桜の木や芝に水をやるため村人がここへ来るので、朝夕のまだ観光客の少ない時間には、地元民と観光客との交流がみられるのかもしれない。ぜひこうした光景が日常的になることを望みたいものである。

桜は移植時期が遅かったためか、やや元気がなかったが一冬越した昨年は新しい枝葉が出ていた。上部の枝の一部は枯れているものの、数年後には予想通り夏の緑陰と春先の花の楽しみを与えてくれるに違いない。

謝辞

本プロジェクトが筆者の研究室へ委託されることになった直接のきっかけは、当時五箇山地域の世界遺産登録受入れ態勢を検討する委員会に出席していた本学教授山岸政雄氏の推薦によるものである。

また、銘板の英文を本学教授横川善正氏に丁寧にチェックして頂いた。記して両教授に謝意を表したい。

なお銘板の原図作成に当ってはデザイン科助手(当時)の栗野由美さんに大いにお世話になったことを謝意を込めて記しておく。

参考・引用文献

「世界遺産 白川郷・五箇山の合掌造り集落
白川町萩町・平村相倉・上平村菅沼」

合掌造り集落世界遺産記念事業実行委員会発行
1996年

(1~2章の記述は主に当文献による。)

(くろかわ・たけと 環境デザイン)
(平成10年10月30日受理)